「限りなき婦人部活動をめざして」

～今、私達は５年生～

宮崎漁協婦人部
部長　東野三恵子

１．地域の概況

県庁所在地の宮崎市は、県の中央に位置し、人口約３０２千人、青島、日南海岸といった観光地として知られているが、今では、リゾート型のシーガイアも登場するなど、その趣も様変わりをみせている。

２．漁業の概況

所属する宮崎漁協は、最近、カーフェリーターミナル、高速艇トッピーの発着場が設けられるなど、宮崎の海の玄関としての機能整備が進む宮崎新港の南に位置し、正組合員１０５名、准組合員５１名で、主幹漁業は機船船曳網漁業である。

３．グループの組織と運営

婦人部は、平成４年１１月１４日に結成、現在部員数は１０８名である。

部長以下１４名の役員と８名の班長が中心になって、「子供をみつめる日の運動」「ムダとミエをなくす運動」「漁村のくらしを守る安全運動」「貯蓄運動」「漁協認識運動」を５本の柱としてとらえ、「婦人部５つの運動」として活動を展開している。

４．実績活動課題選定の動機

「只今より宮崎漁協婦人部創立総会を開催いたします。」忘れもしない、平成４年１１月１４日、副部長浜田さんの開会宣言で、私達宮崎漁協婦人部は、ゴールなきスタートを切ったのである。遂に婦人部が誕生した感激の日であった。

宮崎漁協は、旧赤江、赤江灘漁協と檍浜漁協の一部が合併し、昭和４２年４月１日に発足した漁協である。

漁協発足以来２５年が経過して、ようやく漁協婦人部の創立を見た訳であるが、まず、これまでの経緯について振り返ってみる。

合併当時の組合の状況は、年間水揚５１百万円、貯金残高２３百万円と、生産高、資金量とも極めて零細な規模で、このため当面は、漁協基盤の拡充強化に重点がおかれていた時代であった。

昭和５３年には、宮崎空港、宮崎新港の整備拡張問題が相次いで浮上、漁場の消滅につながり、死活問題だとして、市内の漁協では大きな問題になった。以来昭和５７年迄は、この２つの問題解決に向けて、漁協、組合員あげて対処した時期である。私もまだ幼かった２人の子供の手を引いて、色々な集会に参加したものである。

空港問題、新港問題共に漁業補償ということで決着のついた昭和５８年頃になると、

漁協内でも漁家生活改善運動の推進組織として、漁協婦人部の結成が検討される様になった。しかしながら、当漁協は、地区が木花、赤江、宮崎地区と広範囲にわたり、しかも、その地区内いわゆる市街地に漁家が点在しており、漁協を中心とした地域に漁村集落がない環境にあるという地理的なハンディが大きなネックになって、婦人部問題は進展のないまま時は流れた。

平成2年に宮崎漁協貯蓄実践委員会が結成された。その構成メンバーに、主幹漁業である機船船曳網の加工場経営者を中心とした、私達女性１５名が委嘱された。

年4回実施される特別貯蓄運動を支援するということで、今でもこの組織は継続されているが、何回か貯蓄の会合で皆さんと顔を会わせる様になると、誰からともなく婦人部のことも話題になる様になった。

平成4年4月、漁協から、婦人部結成準備委員会を設立したいので、貯蓄実践委員の方に、準備委員になってもらえないかとの話しがあり、引き受けることになった。

何回か漁協で委員会が開催された。何で今更婦人部を、という反対の声もあったが、結成の方向で話しは進んだ。まず、組織をどうするかということであった。

当組合の主幹漁業は、6統の機船船曳網漁業で、その下に加工場が１１経営されており、パッチ船毎にはまとまりがある。そこで班編成は、パッチ船単位毎に6つ、小型船の方々を2つの班とした。

役員の人選を進めていくうちに、私に婦人部長をという話しになった。私は、固くお断りしたが、若くて行動力のある人がいいと、皆さんから押し切られる形で、初代部長を引き受けることになった。

組合員の奥さんは全員、婦人部に加入してもらうことにした。なぜ強制的に加入させられるのかと、強い反対意見もあった。個人個人の都合を聞いていると、まとまらなくなるということで、組合員家庭即婦人部員との原則をつらぬいた。

副部長以下の役員の人選を終え総会に望んだ。

当日、本人出席者は６０名、丁度部員として呼びかけた１２０名の半数の出席であったが、私達の提案した、婦人部綱領、規約、役員選任等の議案はそのまま承認され、宮崎漁協婦人部は県下婦人部の中に、晴れて仲間入りをすることができた。

5．実践活動状況及び効果

婦人部は結成され、私が部長に選任されてどうにか船出はしたが、これからどうやって婦人部活動を展開していけばいいのか、全く検討がつかなかった。何回か委員会を開催し、今後の運営について話し合いを行った。

先進地婦人部を視察し、その活動を参考にしたらということで、平成5年の全国発表大会で、活動状況を発表され、農林中央金庫理事長賞を受賞された県北の富島漁協婦人部を、参事さん、事務局共々訪れることにした。婦人部手づくりの郷土料理をごちそうになりながらの交流会となったが、さすが、各種グループ活動を始めとして、地域に密着したすばらしい活動振りを伺うことができ、参加した１４名の役員は、只、只、感心するばかりであった。自分達にもああいった活動が出来るだろうかと、不安と期待の入り混じった複雑な気持ちで帰路についたものである。

帰って早速委員会を招集し、今後の活動内容についての検討を行った。

・委員会は原則として月１回開催すること
・部員相互の情報連絡と交流を図るため手づくり広報誌を発行すること
・アンケートをとって、部員の希望するグループ活動を始めること
といった様な事をまとめた。

広報誌については、早速、委員の中から広報担当を５名決めて、発行していくことにした。第１号が発行されたのが平成５年３月１９日の事である。Ｂ４版サイズ、担当委員が手書きし、両面コピーした粗末なものであるが、原稿書きから割り付け、写真選びと、何しろ皆さん初めてのことである。出来上がった時の感激は今だに忘れられない。

この広報誌は“ウェーブズ”と名付けられ、年２回発行し、全部員に配付しているが、婦人部の活動内容がよく判ると、楽しみにされる様になっている。

又、漁協事業への理解と、婦人部員としての自覚を促す意味から、婦人部発足を記念して、婦人部貯金の加入をお願いする事にした。加工場単位には、すでに漁協から箱貯金が回覧されていたので、それを利用し、小型船や乗組員さんの部員には、郵便ポスト型の貯金箱を購入、家庭に配付、毎月１７日には、班長さんが集金するという形で、２年ものの積立貯金として、部員さんに協力を頂いている。

平成５年４月には、漁協が漁具倉庫の２階を改造し、調理台や食器棚の備品を購入して、婦人部に提供して頂くなど、婦人部に対する期待も形となって表れてきた。

今ではここを「婦人部活動センター」として、その名前の通り活動の拠点として大いに利用している。

先に調査したアンケートの集計結果から、グループ活動として、希望の多かったストレッチ体操、料理、手芸、民舞教室を開催していくことにした。

講師は、当面、各委員さん達が得意とする部門を担当したり、部員さんの中で趣味として携わっておられる方々にお願いすることにしているが、委員さんには、とりあえず料理担当２名、手芸担当２名、民舞担当２名をお願いし、役割分担をする形で企画している。

現在、各教室とも婦人部活動センターを利用し、年２回から３回開催をしている。

婦人部で行事を企画した時、一番気になるのが漁協までの参加者の足の確保である。車の運転のできる委員さん方にお願いし、出席の連絡のあった部員さんを一緒に連れて来てもらう形でカバーしている。又、チリメン漁があると、加工場へ出掛けなくてはならないので、参加者が当然少なくなるという悩みもある。今まで開催した各種グループ活動への参加者は、平均２０名程度であった。

結成２年目の平成５年からは、県下漁協婦人部で取り組んでいる「ムダとミエをなくす運動」と「子供をみつめる日の運動」の一環として、８月の夏休み時期に、家庭内の不用品のバザーと、漁婦連で実施される「子供をみつめる日作品展」への作品募集を呼びかける、「宮崎漁協婦人部バザー＆夏休み作品展」を開催している。この催しには、みんなが気楽に集まる機会をつくりたいという願いもある。バザー益金の一部は海難遺児募金へ協力している。今年で４回を数えたが、今後も婦人部の恒例行事として定着させていきたいと話し合っている所である。

初めて企画した平成５年のことである。手書きのポスターを８０枚程度作成し、各地区内に掲示し参加を呼びかける訳であるが、バザー前日に、そのポスターを見られた一

般の人から「漁協婦人部のバザーだとお魚類もありますか」との電話があった。私は一般の人の事は全く考えていなかったので、急きょ加工場へ協力を依頼し、チリメン、イリコといった加工品を並べたことがあった。今では、毎年加工場からも協力をお願いしているが、この時は、私達の活動に、一般の人も参加してもらえるようになった事を、うれしく思ったものである。又、子供達の作品についても、一般の家庭からも参加がもらえる様になった。漁業のことを少しでも理解してもらえるいい機会であってほしいと思っている。

魚食普及活動への取り組みとしては、宮崎市農林水産まつりへの参加がある。第１０回目を数えた平成５年から、婦人部活動の１つとして参加している。それまでは、漁協職員のみの参加であったが、自分達が加工し製品化したチリメン、イリコ、イカ子等を直接販売し、消費者の生の声を聞く機会が出来たのである。

前日からの準備は大変なものであるが、宮崎漁協の加工製品を、市民の皆さんに大いにＰ．Ｒできる一番の時だと、役員一同張り切って取り組んでいる活動の一つになってきた。

６．波及効果と今後の課題

総会終了後には、お互いの意思の疎通とふれあいを深めるため、必ず出席者全員参加のささやかな懇親会の場を設けている。今では、部員同志が夫々同じ仲間だという意識も芽生えてきたと思う。

振り返れば、婦人部結成以来、みんなで右往左往しながらも、何とか自分達の活動をと頑張ってきた。一応、活動のレールは敷かれそれなりの成果を収めつつある。

しかしながら、３０万人中核都市づくりをめざす宮崎市の地域環境は目まぐるしく変化している。これからは、都市型婦人部として他団体とも協調し、海と漁業を守る環境問題への取り組みや、高齢化社会への対応と課題は限りないものがある。

婦人部結成後５年を迎えた今、先輩婦人部の活動に負けることなく、更に時代の要請に対応した活動を取り入れながら、際限のない婦人部運動に取り組んで参りたい。